

第8回環境教育・環境学習ネットワーク会議 議事要旨

日 時：平成24年5月31日（木） 15:00～17:00

場 所：1号館3階会議室B

出席委員：高橋会長、鈴木副会長、稲委員、宇佐美委員、内船委員、小松委員、高橋（直）委員、高橋（正）委員、瀧上委員、橘委員、奈良谷委員、野崎委員、原口委員、依田委員（14名）

事務局：環境政策部環境企画課（小澤課長、笠原主査、茂木主査、中丸主任、高橋）
環境政策部環境企画課自然環境担当（大森課長）

傍聴：なし

◆ 会議の流れ

- 1 開会
- 2 議題
 - (1) 会議議事進行方法について
 - (2) よこすかE C O大賞の見直しについて
- 3 その他

◆ 議題の要旨

(1) 会議議事進行方法について【事務局から説明】

第7回会議で議題にあがったグループ討議の導入について、具体的な方法を事務局から提案した。

実施基準：毎回ではなく、多くの意見が欲しいとき等必要に応じて実施する。

グループ構成：1グループ5人の3グループ体制を基本とし、異なる主体を混ぜた構成員とする。1年間グループ構成員は同じとする。

進行方法：概ね30分程度とし、司会と全体会の報告者を決めてから討論を始める。

会 場：全体会と同じ会場で行う。

(会長) 事務局からの説明に対して、ご意見、質問があれば挙手のうえお願いしたい。

(鈴木委員) 全体会という言葉だが、今、開催されているネットワーク会議以外の全体会という意味合いか。

(事務局) 資料上、全体会という表現をさせていただいているが、今、この場面を全体会として表現しており、それ以外のものではない。

(高橋(正)委員) 全体的なイメージを確認したい。グループ討議する場合は、今日のような全体会があって、その中で「グループ討議をこういったテーマで行う」ということが、事前や当日に指示がある。そして、グループ討議に移って、終わったらまとめて、また全体会に集まり、代表の方が報告し、一回の会合の中で閉じるということでもいいか。そうであれば、3つグループがあった時にグループ討議はそれぞれ別のテーマでやるのか、同じテーマでやるのか。テーマが2つしかなかった際に3つのグループがあった時、残りのグループはどうするのか。その辺のイメージはどのように考えているか。

(事務局) 具体的にはその時の案件に応じて行う。数多い意見をいただきたいというのが、グループ討議の主旨になる。一番多いのが、一つの案件を3つのグループで討議していただくケースになると思う。限られた時間でご検討いただく上で、3つのグループに分かれればご発言いただく時間も多く取れるかと考える。こういった形でまず始めてみて、不都合があれば色々変えていければと思っている。

(高橋(正)委員) ようするに、一つのテーマがあって、それを3つのグループで討議し、それをまた持ち寄るといった提案ということでもいいか。

(野崎委員) 議題は事前に決めることになると思うが、その時にこれはグループ討議にするとか、全体会議で話し合うとかということ、議題の連絡をいただく時に事前に知らせてもらうことは可能か。その方が、この場に来て突然グループ会議というよりも、案件によっては事前準備や考えをまとめる作業がしやすくなると思う。

(事務局) グループ討議にするかしないかは、この場で一度ご意見をいただいた上でとなるが、議題を送付する際に、グループ討議の案件候補ということ、事前に提示できるように進めたい。

(会長) 今日の議事の進め方は、この後の議題2はグループ討議を行うという考えでいいか。

(事務局) 今日はグループ討議の方向を事務局からご提案させていただいた。この提案に沿って、議題2のECO大賞の見直しについて、グループ討議を活用してご意見をいただくことを予定している。会場も、あらかじめそういう配置で作らせていただいた。

(会長) それでは、グループ討議、進め方、基本的に先程、事務局より説明があったが、特に異論、異議ないということで事務局案で進めてよろしいか。

(異 議 な し)

◆議題の要旨

(2) 横須賀E C O大賞の見直しについて【事務局から説明】

横須賀E C O大賞は、市民の環境活動に対する関心を高め、新たな活動を誘発する目的で実施されている。平成 21 年度に開始したが、応募件数が伸びていないことから、よりよい表彰制度とするため今年度は見直しを行う 1 年とした。

これまで、選考委員会や第 7 回ネットワーク会議でも、表彰制度について意見をいただいたところである。そういった意見をまとめ、事務局としては応募団体が少ないことが最大の課題と認識しており、その原因は「周知方法が十分でないこと」、「賞のインセンティブの不足」と考える。

本日は特に賞のインセンティブについて、「もらってうれしい賞にするにはどうすればいいか」という視点で討論したい。

(会長) それでは、議論の前に参考資料②の内容だが、横須賀市のE C O大賞の募集、表彰のやり方と、集められた市の特徴や、どんなところが違うのかといったことを、事務局でまとめているか。

(事務局) 具体的にデータとして、まとめてはいないが、資料 9 ページの藤沢市を見ていただきたい。ふじさわ環境大賞の 4 の対象部門及び賞の種類・副賞を見ていただくと、省エネ部門、環境活動部門、両部門共通とあり、その中がアイウエと分かれている。それぞれ賞のネーミングを比較すると、横須賀の現状は、E C O大賞があり、小中学校部門、地域活動部門の二つの賞がある。藤沢市の場合、部門を細かくネーミング分けし、省エネのアイデア部門というふうに賞の名前から対象のイメージがつけやすい。

また、横須賀の場合、対象となっているのが学校、事業者、市民グループなどの団体だが、藤沢市の場合、一般市民の方が家庭の中などで色々長年これまで個人として取り組んでいたものでも応募できる。

そして藤沢市では、副賞として環境大賞には 15 万円の商品券が出るというようなところが違う。1 ページ目の小松市のエコ大賞、こちらも対象に個人が含まれており、藤沢市に近い。以上が横須賀のE C O大賞との違いとなっている。

(会長) 横須賀も 3 回やって見直す必要性を感じたということだが、小松市の場合平成 22 年度とあり、藤沢市は第 1 回ということで、まだそこまで回数を重ねていない。やり方に問題があったとか、順調にいつているといったことについて情報はるか。

(事務局) 藤沢市の場合、資料は 21 年度となっているが、見直しなどそこまでは把握して

いない。

(会長) それでは、内容に関してご意見をお願いしたい。事務局からの提案では、この内容をグループ討議としてやって欲しいということだが、この場で皆さんで話し合ってもいいのではという案もあると思うが、お考えがあればお願いしたい。

(鈴木委員) 小松市、藤沢市が、横須賀と違って何年もやっていて、むしろ件数が増えているというのであれば構わないが、実績がそれほどない他市と、3回目にぶつかって停滞している横須賀市を比較するのは難しい。賞金をあげるのかといった見直しの視点が複数あるが、討議の時間を考えないとまとまりがつかないような気がする。横須賀とこの二つはどこが違うか、その辺もはっきりした答えがないと思う。実際、小松市は何件くらい出たのか。

(事務局) 参考の応募件数は小松市の場合ホームページに掲載があり、平成23年度応募件数58件、前年の22年度は51件ということで7件増えている。

(鈴木委員) 一般家庭の応募はどのくらいあったのか。

(事務局) 全体の件数のみで、そこまでは把握していない。

(高橋(正)委員) 討論をすすめるにあたり、ECO大賞の応募件数ないしは表彰を増やすのか、それとも環境活動をやっている分母を増やすのか、どちらにポイントをおくのか。この資料を見ると、どうもより良い表彰にする、というような表現となっているが、分母が増えない限りはより良い表彰もないかと思う。そうすると、例えば今回減っているのは、分母が減っているから応募が減ったのか、そこをもう少し分析して、どちらを優先するのかということが大事な気がする。

そうした時に討議していただきたいということで、もらって嬉しい賞や応募したくなる賞にするにはどうすればいいかということが本当の視点なのか、それとも分母を増やしてより広いところからいい提案を出してもらうのが目的なのか。もっと言えば表彰というのは、本当は分母なり環境活動そのものの活性化が目的のはずなのでそちらに重点をおくのか。その辺の視点をどうするか考えるのが大事な気がする。先程の藤沢市や小松市をみると、個人が入っていることで分母が増えている感じがする。そうしたアプローチを含めてのグループ討議にすると実りのある討議になるかなという感じがした。

(会長) 今、非常に大事な点が指摘された。表彰ということにこだわり過ぎているが、本当の表彰の目的はその下の分母を増やすことではないか。分母を増やすことも含めて表彰

を考える必要があるということだが、皆さんのその辺のお考え、ご意見があればお願いしたい。

(内船委員) ECO大賞のエコというイメージされている枠を広げるのも有りかと思っている。既存の賞の枠組みだと、博物館でアドバイスができる活動がなかなか少なかったりするんで、自然史を研究するのがエコにつながるなら、その辺も拾うというようなルールで枠を広げられるのではないかと思う。

(鈴木委員) 何らかの手法を使った方がいいと思う。分母を増やすためにはどうしたらいいか。ブレインストーミングなど、手法を使わないと漏れが出てくる。

(会長) 先程言われた意見に関連するが、資料2-6の前のネットワーク会議での意見の中で、対象が自然環境系の理念が強すぎる。分野が絞られている、限られているのも問題となっている。

(野崎委員) 今の高橋委員長の話に関係すると思うが、小松市の場合も、藤沢市の場合も、対象には家庭が入っているが、学校や企業など団体が入っているのは横須賀と同じだと思う。活動分類を見ると自然保護というのが特別賞、家庭部門の1件のみだ。後は、環境学習とか生活環境、ごみのことやリサイクルのことで賞を受けている。藤沢市を見ると、「省エネ部門」と「環境活動部門」と「たいへんよくできました賞」と部門がはっきり三つに分かれている。市の特性もあると思うが、藤沢市に関しては、省エネ部門が大きく、自然環境系の部類に入るものはないのが横須賀市との大きな違いだと思う。分母を増やすとなると、部門をECO大賞と大きくするのではなく、はっきり部門を分けて、そして省エネ部門があると、個人や家庭の応募がしやすくなると思う。そこまで市の方で広げることができるのであれば、応募しやすくなって分母も増えるかもしれないと思った。

(会長) 今、野崎委員が言われたことに関係するが、考えてみたら、省エネに関しては「横須賀市地球温暖化対策地域協議会」で省エネ関係のアイデアコンクールを表彰している。ごみや資源の関係は「クリーンよこすか」でやっている。水に関しては、上下水道局でポスターコンクールをやっている。その辺、横須賀の環境関連の表彰制度はどうなっているか、事務局はまとめているか。横須賀市全体でみたら、色々と表彰制度があるのではないか。一方で省エネをやっていて、ECO大賞の中でまた省エネというのは、それでいいのかどうかというのもあるので、まず共通認識として横須賀市でどんな環境がらみの表彰制度があるのかを把握したい。

(事務局) 会長がおっしゃられた部分は間違いない。市の様々な部局でやっていて、事務

局で集めた情報はないので、申し訳ありませんが今日は答えられる状況ではない。

(高橋(正)委員) 分母を広げるということでみた時に、先程の野崎委員の話にも関連するが、横須賀市の場合、E C O大賞の募集を見ると、大きな赤い字で「環境保全」が前面に出ている。自然環境の応募が多いのは、このところを見てしまうからかと思う。しかし、中の応募用紙を見ると活動地域の中が八つに分類されていて地球温暖化や省エネ、新エネルギーということが入っている。また、E C O大賞の表彰要綱をみると総則のところ「環境意識の向上と環境の保全、再生、活用等の活動」ということで、視点が環境保全の方にいって、その中にプラスアルファで省エネや温暖化が入っているような感じがする。応募する方もどちらかというと、環境保全に視点がいつてしまっ分母として広がり狭められているのではないか。

そうすると例えば横須賀市地球温暖化防止地域協議会等で節電の賞をやっているが、E C O大賞は非常に大きな名前なので、その中でまとめていく考え方も、もしかすると出てくるのかなという感じがした。

(依田委員) 同じ意見になるが、資料2に環境の保全・再生・活用とあるが、一番大きいのは環境活動で、その下に環境保全等がある。しかし、ポスターには赤字で「環境保全活動」とあり、これは保全ではなく「環境活動」が相応しいと思う。保全というのは「環境活動」の下にあるべきだ。この下の方には黒字で「表彰の対象となる活動は、自然環境の保全活動や温暖化問題への取り組み」と書いてあるが、この文字が目立ってしまう。

(高橋(正)委員) なぜこうなったかと言うのは表彰要綱の中の一番上に保全という言葉が入っているので、そこを受けてかと思う。この整合そのものは合っているが、これを含めてどうするかという議論も大事だと思う。

(依田委員) 環境活動についても定義付けをはっきりすればいいのではないか。自然、リサイクル、省エネ、温暖化、環境というようなことをはっきりと明記すればそれでいいのではないかと思う。応募について自然環境系が多いのは、そういう活動が横須賀市の場合が多いというふうにとらえた方がいい。

(会長) 学校の先生からのご意見はいかがか。

(原口委員) 今、話を聞いていて、分母を広げるということは大事なことだと思った。自分がやっていることが、環境の活動になっているかどうかあまり意識せずにやっている方もいらっしゃるのではないか。以前、毎朝5時半に起きて、小学校の校門のごみを掃いていた地域の方がいらした。本当に地道な取り組みで、ご本人は決して環境の保全活動だと

いう意識はないが、とても大切な取り組みだと思う。横須賀市内全域を見渡した時に、実はそうした活動をされているが、それが環境活動だという意識をされていないということがあると思う。だとすると、アナウンスをする際に例をあげることも有効と思う。先程、依田委員からもあったが、定義付けをする中で、更に「こうしたことも環境活動にあげられます」という例をあげて周知することで、分母が増えるというか、もう既にやっていたいでいる方が出てくると思う。

(会長) 去年E C O大賞で学校部門賞を受賞した、立場としてのご意見はいかがか。

(橘委員) 応募する側の気持ちから、今までどういう団体が、どういう活動で賞をもらっているのかというのをまず見て、そういうのだったらもらえるのかなと思って応募する人が多いと思う。したがって、今回3回行ってきたものをみて、4回目に応募する方は応募するということになるのではないかと思う。今まで自然環境を保全するような活動が多かったから、また別の部門へと広げたいが、このままにしているとやはり別な分野からの応募というのはなかなか期待できないと思う。ですから、具体例をあげるとか、他市のようにわかりやすい名前をつけた部門を作ると手をあげやすいのではないかと思う。

(会長) 昨年応募された、稲先生はいかがか。

(稲委員) 昨年応募するにあたっては、環境保全、環境を守っていくような賞かなという認識があった。校内にあるビオトープでの活動がE C O大賞に相応しいと考えていなかったのので、最初は応募しようとは思っていなかった。周りの方から私の活動を聞きつけてくださり、応募したらどうかと薦めていただいたので、大丈夫なのかと認識して、昨年は応募をした。やはり原口委員が言われたとおり、活動がこの賞に応募していいのかどうか、先生方が分かっていないことが多いのではないかと考えている。実はこういう環境学習に取り組んでいる先生方は、かなり色々な学校にいるのではないかと思う。その例を私たちが声かけをしていけば、まずは広がるのではないかと思う。そこから分母を広げていく方法は、また皆さんで考えていきたいと思っている。

(会長) 宇佐美委員、いかがか。

(宇佐美委員)

総合的な学習の時間が始まった時は、先生方が色々なものにチャレンジした。しかし、最近若い先生がものすごく増えており、何をやらせたいのかというところで、学校の活動がある程度パターン化してしまっていて、そこに自分ものっているという傾向がある。そうすると、例えばこういうチラシを見た時も、「うちの学校は昨年、出していましたっけ」と

いう反応になってしまうところも多いと思う。ご意見でも出ていたように、ぱっと見た時に、保全ってこの写真を見るとかなり大掛かりかな？違うかな？というような判断をしている若い先生もたくさんいるように思う。皆様のご意見にあったように「こんな活動でもいいんだな」ということが伝われば分母は増えていくかなと思う。

(会長) 現状を認識していただくために色々な方からお話をいただいたが、このままこの会議で議論を続けていくのか、事務局からはグループに分かれて色々な意見を出して欲しいという提案が出ているが、いかがか。3つのグループに分かれての討議でよろしいか。

(小松委員) 昨年度までの流れがわからないので伺いたい。資料2の4見直しについての、二つ目に「より良い表彰制度とするため、平成24年度は見直しを行う1年とした」とあるのだが、今年度はE C O大賞の部分について募集はしないということなのか。

(事務局) その通り。現状は今まで3か年、毎年募集をしていたが、今年から隔年ということで24年度は見直しをすると同時に隔年にし、次は25年、27年というのが新しいE C O大賞の要綱というかたちになっている。件数が伸びないというだけではなく、環境活動、環境保全という、E C O大賞の目的として掲げる活動を強調するにしても、1年で新しいものは出てこないのではないかとということもある。既存で今まで活動をされていた団体の方たちは、最初の3年でご応募いただいたと思うのだが、新たな試みとか既存でやっていることをもう少しレベルを上げていこうという活動は、1年では成果が出てこないということで見直しをしつつ、隔年ということになっている。

(小松委員) 今日の会議の中で、こうしようとする程度めどをつけないとならないのか。今年度の会議が後何回かあると思うのだが、その会議で継続的にE C O大賞の部分について話し合いをしていくのか、それとも今日である程度決めるということか。

(事務局) 事務局としては、本日のネットワーク会議の中で一つの答えにまとめていただきたいということではない。色々な活動をされている方のご出席がありますので、色々な形でご意見をいただいて、その中で現状見直しているものに反映させていきたい。

(小松委員) 今、委員の方からお話をしていただいたようなことをグループ討議で話をし、色々出たものをまたこの場に戻った時に事務局の方で吸い上げるというのが、本来やりたかったことだとわかった。それであれば、グループ討議をすべきだと思う。

(会長) 今年E C O大賞をやるということは予算的措置の問題があって、ないという理解でいいか。

(事務局) はい。今年、募集することはございません。

(会長) それでは、グループ討議に移りたいと思うので、席の方に移り、司会、書記、発表者を決めて始めてください。それではよろしくお願いします。

～ グループ討議 ～

(会長) 各グループからそれぞれのたくさんの意見が出たと思うが、グループAから発表をお願いしたい。

グループA (稲委員)

①募集・応募の情報提供について

過去の受賞の例を示してあげるのが親切ではないか。また、環境学習等の定義付けをしっかりとすべきである。2、3年継続的に行っている活動を表彰の対象とするべきなので、応募の際は活動期間を明記するようにしてはどうか。

②個人の募集について

個人の募集も募っていく方がより分母を広げるにはよいのではないか。

③周知パンフレットについて

固い表現になっていて、賞の魅力が伝わっていない。それから、ECO大賞がアルファベットで書かれており、最初「イーシーオー大賞」と読んだという委員の方もいたし、カタカナの方がいいのではという意見もあった。

④学校への対策について

学校では一年単位で実践を行う場合が多い。委員から話もあったが、表彰がない年の実践がどのようになるのかが気になる。出前トーク、学校での出前授業を多くしていき、その後取り組まれた点を応募してもらう活動も必要なのではないか。

応募については、学校単位で応募するという認識で捉えている先生も多い気がする。そうではなく、クラスやクラスの中の少人数の児童でも応募できるようなかたちをとれば、もっと分母が増えていくのではないか。

また、パンフレットは、学校は学校用として、内容は学校の実践をのせやすいかたちにする。学校の場合、活動・実践したことを書かなければいけないが、募集時期と実際の活動の進捗が合わない。個人の募集を増やすのであれば、家庭に一部ずつ配り、学校から子どもを通して保護者にとにかくたちも取れるという意見も出た。

⑤中学校の清掃活動の位置づけについて

中学校からの募集が少ないということだが、中学校では地域の清掃活動等をしていることがかなり多い。そのような活動も表彰の対象としていいのではという意見もあったが、

横須賀ではクリーンよこすかがあり、その辺りとの連携が必要ではないか。清掃活動をどう捉えていくのが課題である。

⑥賞金について

賞金等がないが、その辺りをどう考えていくか。

⑦受賞しなかった団体への評価のフィードバックについて

活動がどう評価されているのか、受賞されなかった団体へ評価をフィードバックし、その後の活動の励みにしてもらうのはどうか。またその一つとしてECO通信や広報よこすかなどに紹介し、更に活動の継続を図る取り組みも連携してやっていったらどうか。

(会長) ありがとうございます。後はECO大賞とっておきながら、あまりにもパンフレットが良すぎてエコではないというふうな指摘があった。

続きまして、Bグループですが、いくつか重なっているところもあると思うが、省略せずに発表していただきたい。

Bグループ (高橋(正)委員)

①分母の拡大について

今までのECO大賞だと環境保全が前面に出ている感じがするので、実は省エネといったものも多くやっているし、今後はそういうところも大事になるのではないか。対象分野をもう少し分かりやすく広げていくことが大事ではないか。

②賞のインセンティブについて

特に学校の生徒たちは具体的に環境に対して、よくやりましたということ言葉を伝えてもらえるとなると非常にやる気がアップするので、表彰の仕方、個別の褒める言葉というのが欲しい。もう一つ、団体で活動している時も団体の中心メンバーは表彰されたことが分かるが、他のメンバーにはなかなか伝わりにくいので、その辺の具体的なインセンティブをもう少し工夫するといいい。

③「家庭」への応募対象の拡大について

応募の対象が、今までは学校の団体、各活動団体であったが、個人より「家庭」という単位が一つ大事ではないか。結局、省エネとか紙ごみの工夫というのも家庭が中心にやっていることがあり、個人でやることは意外と少ないのではないか。そうすると対象として家庭個人というくりでの対象分野を一つ作ると広がっていくのではないか。

④学校活動を対象とした場合の開催年について

開催年に関して、学校で活動する場合には、学年が変わっていくということで、隔年だとその対象になる学年とならない学年が出ることもあり、できれば毎年あるといいい。

⑤周知、告知について

PRするチャンネルとして、どういうところを捉えるか。今後どこに届けるかということを含めて、工夫していくことが大事。広報よこすかは重要だが、それだけで十分なのか。

タウン誌といったものの活用も含めて工夫があるといい。

⑥応募に対する支援について

どう応募していいのかわからない場合に対して、応募の相談窓口的なものを設けるとより応募しやすくなるのではないか。

(会長) ありがとうございます。それではCグループをお願いします。

Cグループ (原口委員)

①募集期間の長さ、時期の見直しについて

募集の期間が短い。特に学校の先生方においてはこの期間では実践が途中で、この中でやっていくのが厳しいのではないか。その見直しができないか。

②表彰の特典の必要性について

賞の魅力として賞金、賞品等が出るというのではないか。賞品のためにやっているわけではないという感覚もあると思うが、もう少し考えられないだろうか。

③対象団体の情報収集について

募集を待つという形ではなく、こちらから拾い上げていくことが必要なのではないか。推薦等も含めてどのような活動をしているかアンテナを張る。これまでの取り組みの中でも具体的にそうした活動を察知、バックアップをしていただいて応募に至った状況があると思う。そうしたことをこちら側から積極的に3年間くらい行っていくと、裾野が広がっていくのではないか。例えば、具体的にそうした取り組みをしているところを知っている方が、取材に同行して把握してくる、もしくはそれを吸い上げて応募する。

④部門の増設について

環境保全というという言葉があるが、部門を幾つか増やしていくことで裾野が広がっていくのではないか。

⑤環境活動の定義の明確化について

どのようなものが当てはまるかということを中心に細かく、しかも明確にしていく必要があるのではないか。

⑥チラシの表現について

募集のチラシが少し硬いのではないか。もう少し柔らかく親しみやすいように、募集しやすいような部分も必要なのではないか。

⑦応募用紙について

募集をする際に非常に書く項目が多いが、少し簡略化をするというのではないか。例えば活動の経過や実績というところは、学校などでは、取り組む途中の部分の時は募集ができないが、「このようなかたちで取り組んでいこうと思っています」くらいの応募の仕方、その取り組みの方向性で判断をすればもっと応募も増えていくのではないか。更にそうした方向性の中で、こちらで実際にその学校に出かけて行って、活動を見せてい

ただくとか、場合によってはそこにアドバイスをしていくと、より良いものが出てくるのではないかと。また選考の仕方についても、募集要項を簡略化するので実際にこちらの方から応募資料を元に出かけて行って、どのように活動しているのかを把握していく。これは3つ目にあげたところと絡んでいて、こちらからアンテナを張るところにつながっていくのではないかと。

⑧活動の外部広報紙への掲載

2つ目の表彰の特典に絡む部分もあるが、タウンニュース等の記事にしてもらおうとか、特集を組んでもらう。意外とそうした記事になることによって、モチベーションが上がったりする。ECO通信に載せるのはもちろんあるが、そうした地域誌等に、全国誌に載せていただくとうまいが、記事になることでモチベーションが高くなる。

(会長) 色々なご意見ありがとうございました。

代表の方に発表をしていただいたが、他のグループに対して質問事項がありましたらお願いしたい。特になければ、色々な意見が出ましたが、参考にして事務局で進めていただきたい。よろしくをお願いします。

それでは、審議事項はこれで終わりましたが、その他、事務局からお願いします。

(3) その他【事務局から説明】

①よこすかECO通信第5号の発行について

6月を発行予定とする。委員の皆さまには内容の確認を依頼する。

②第9回会議について

次回第9回は9月の開催を予定。

③自然環境担当課 パンフレットの説明 (大森担当課長)

昨年、環境政策部ができ、環境企画課の中に自然環境担当ができた。新しい分野なので、まず横須賀市内の自然環境の把握をし、指標なども積極的に作っていかうと目標を掲げて作業を進めている。その中で、作業計画の途中の部分を使いパンフレットをつくった。アンケート調査や、講習会や研修会等でお願いをしたり、資料提供をいただいたりするとき、事業の紹介として使おうと作ったものである。皆さま方が何らかの場面で一つの環境教育・環境学習として、ご使用の希望があればお分けすることができる。

(会長) それではこれで本日予定していた、議題、連絡事項終わりました。ご協力ありがとうございました。